



2012・8

SORA 44号

青葉の夜

柴田 佐知子

涼風や旧家は柱際立ちて

早き床父に敷きゐる芒種かな

手秤のまこと大まか苺売る

浜木綿や古き町には古き神

昼顔に白波寄せてくるばかり

まづ空を見上げて日傘ひらきけり

海神に弓なりの砂洲大南風

夏蓬漁師に昼の酒が効く

駅員は折り目正しく花カンナ

水源の水は震へて若楓

落ち合ひて川の滾れり山法師

九十の母が辞書繰る青葉の夜

残党はちりぢりとなり草いきれ

次の世をたのむ気はなし桐の花

雀らはちよつと戦ひ萋の花

腹這ひてひらがな書く子蟬しぐれ

日々細る白地の父を薬づけ

懐かしくなりて買ひたる天花粉

絹扇ひらくゆつくり目を逸らす

神罰のすでに下りし暑さとも

当ての無き一と日を贅として涼し

熱帯魚 高倉和子

東京下町を歩く 中田みなみ

麦秋や記憶一気にさかのぼる

当番札下げし出窓や日々草

父の夢母の願ひや麦こがし

芋殻焚くうしろ姿に一礼し

雨雲の下りくる早さ花菖蒲

盆入りの提灯となり屋形船

鵜飼舟ゆつくり闇に収まりぬ

舳舟疊二枚や蠅叩く

七月や水のよろこぶ岩の上

盗つ人の墓を去りたるサンガラス

鼠小僧の墓

目がくらむ青空のあり蟻地獄

落語家に勧められたるところてん

吉原遊女の

土砂降りの窓の煙りて巴里祭

大夕立投げ込み寺を洗ひけり

退屈な夜の病院熱帯魚

子規庵の帰りに買ひし新生姜

シラ書 荒井千佐代

片蔭 服部早苗

山彦のよく返る日よ柏餅

車麩の水にふくらむ遅日かな

袋掛け濁りし川に潮差し来

筍炊かん糠もあり時もある

五月逝く口を汚してパスタ食ふ

改札を先に抜けゆく夏燕

葬儀ミサ聖堂に海霧迫り来る

これよりは片蔭のなき道ぞいざ

青鷺の三步をあゆみ日暮れたり

香水の金環食を振りむかず

開け閉てに潮の匂ひや冷素麺

傘干せばまたもこぼるる柿の花

シラ書読むメロンに微かなる死臭

雨足のどこか明るし白菖蒲

胡瓜採みつつヴェルデイのレクイエム

二階から抱へくるなりアマリリス

家族写真
柴田志津子

どんたくや日除け代りの舞扇

下駄履きの家族写真や立葵

父祖よりの井水に種を浸しけり

葉桜や老人体操背を曲げて

雲水と交す一礼花うつぎ

防音壁高くて初夏の空ばかり

真つ向に唐津城据ゑ夏料理

鉄塊を降ろす地響き夏の雲

繭の花
だいじみどり

炎天をまつかな顔で会ひにくる

客座布団積んであるから黴臭い

電柱の片陰に入り待つてゐる

出て行けば帰る家なし繭の花

藍浴衣祠の中を紙で拭く

洗ひたる髪の抜毛をまるめこむ

亡弟と峠を越ゆる夏休

笑ひづくめの越境の今年竹

福岡 栗原京子

神童は素数好みり日の盛

走り根の上へ下へと蛇逃ぐる

稚児抱かれ夢の中なる渡御の道

頓宮へ御神具一式走り込む

殉死してあの世も武士のまま夏日

吉井 高倉恵美子

なるようにならない体花は実に

農機具で小屋いつぱいや田水張る

紫陽花や病院食にまだ慣れず

泣きたいと言ふは気易し芥子の花

初恋の人は軍神雲の峰

糸島 小林朱夏

箱庭を宇宙飛行士のやうに見る

浮き人形勢ひ余り児を泣かす

羅に夫の骨格顕なり

炎帝に十字架の影歪みけり

交差する麒麟の首や雲の峰

粕屋 秋 千 晴

剪定を終へし縁側広くなり

ふる里の襖外せば子が走る

寝ころべば山と空のみ夏座敷

欄干に身を預けをり青楓

夏休み周遊券のひとり旅

粕屋 長 憲 一

糸田 宮 井 知 英

雪一と日連なる峰を降り分けて
雪しまく水は堰かみ堰を越え
春の海へと大河は曲る幾度も
御開帳十二神将従へて
どくだみの白さ変はらず雨のあと

福岡 あさなが捷

爪先まで白塗りしたる先帝祭
青々と莫塵敷きつめて海の家
掬はれて身を振りたる金魚かな
たちまちに嘘はふくらむ心太
螢狩人に待たるる心地して

緑蔭に入りて緑の囚人に
沢蟹の隠れし岩を踏み渡る
武者の顔して田植機の戻り来る
逆光の葉裏脈打つ蓮かな
炎昼や重機獣の声上げて

長崎 鳳 蛮 華

八方に風を透かして花みずき
嘆きより和みに涅槃し給へる
春の果お櫃捨つるに捨てきれず
梅檀の花や曖昧模糊として
みなもとに竜王おはす山開き

福岡 亀井紀子

全集に儼生きてゐるニーチェかな

病室にところを得たる水中花

正論の少し曲がりてビール飲む

香水の似合ふ女のとんがれり

走り根になりきつてゐる青大将

粕屋 吉田 菫

岩に住む古き仏や時鳥

鶏のまぶた重たし合歡の花

天の川長距離トラツク戻りけり

雪解川光のままに海へ入る

躊躇ひを引き剥がすなり大夕立

大阪 田岡千章

燕来る白波見ゆる無人駅

母の日を酔ひぬ小言の母が欲し

古町の屋根はなめらか夜の新樹

桐の花昔語りを墓の前

父の日の鉄砲玉となりにけり

大阪 青木 朋子

日暮れ待つ河原広くて鵜飼かな

芭蕉の句胸より去らず鵜飼舟

鵜に聞かすための快哉川は闇

疲れ鵜の水の匂ひとなつてをり

かなしみの詰まりし鵜籠覗きけり

熊本 松田 明子

餓鬼大将に分けてもらひし蛇の殻

老鶯や屈んで拝む地藏尊

風音に瀬音にまぎる河鹿笛

葉桜や語るに遠きことばかり

農具市鎌鍬の間に肥後守

山梨 野畑 さゆり

郭公のよく啼く日なり休館日

柿の花こぼるる径や父母のこと

十葉や視力戻りし試歩の道

神官の背負はれてゆく山開き

袋掛け富士に農鳥あざやかに

須恵 苑 実 耶

青葉の夜校歌で締むる同窓会

入梅や地下でつながる百貨店

弓なりの白砂青松夏きざす

着崩れを直しつつ見る夏の山

松の芯旧家の玻璃の歪なり

千葉 原 友 子

吹流し峡に五色の風おこす

筒鳥の訝惜しみて鳴きにけり

向日葵の夢は夜空の観覧車

牧の風焼蜀黍の火を煽る

切れ長の目のあるやうな青林檎